

三村むめ日記(2) : 三村竹清家の日常

高杉, 志緒

<https://doi.org/10.15017/4742012>

出版情報 : 雅俗. 12, pp.123-133, 2013-07-12. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :



三村むめ日記（二）——三村竹清家の日常——

高杉 志緒

一 はじめに

本稿は、前号（『雅俗』十一号）に掲載した「三村むめ日記（一）——三村竹清家の日常——」の続稿である。三村竹清（本名清三郎、東京市京橋区で竹間屋を営みつつ江戸学者として活躍、明治九年生、昭和二十八年没）の妻ウメによる日記（現存二冊、明治三十四年九月六日、明治三十五年八月二十四日、中野三敏氏蔵）の内、第一冊目（表紙含めて全三十一丁）の後半にあたる明治三十四年十二月一日（十四丁表二行目）～翌三十五年四月九日（裏見返し）、約四ヶ月分を翻字紹介する。

なお、『雅俗』十一号刊行後、首藤憲彦氏（『雅俗』購読会員）より以下二点の御指摘を頂いた。首藤氏に対し、記して謝意を表する。

一、ウメの生年は、明治十五年（一八八二）であろう。竹清による「いつも遊記」（『三村竹清集』八巻、青裳堂、昭和六十一年、一〇三頁）に「私の家内は午年の一白で」とあるためである。

二、竹清の長男である個の読みは「かん」ではなく「ひろし」ではないか。根拠は以下の二つ。竹清による『不秋草堂日曆』中、昭和二年一月末～二月に「個くる」「ひろしくる」と漢字・平仮名表

記が散見されること（『演劇研究』三十三号、早稲田大学演劇博物館、平成二十二年三月）、森銑三『読書日記』（出版科学総合研究所、昭和五十六年）における昭和十三年八月九日の項に「出征中なる三村比呂之氏」の和歌二首を紹介し「比呂之氏は竹清大人の令息なり」と記すことである。

以上二点の首藤氏の御指摘を踏まえ、資料紹介を進める。

また、前号に掲載したウメの日記中、明治三十四年九月十九日の注に一部誤りがあった（『雅俗』十一号、九十二頁下段八行目）。竹清の日記によると「大野とは」は「ウメ実家父「高杉卯兵衛」後妻」ではなく「ウメ実家父「高杉卯兵衛」姉」とされる（『不秋草堂日曆（十四）』『演劇研究』二十九号、平成十八年三月、一九九頁）。記して訂正させて頂く。

二 凡例

翻字は、左記の要領で行った。

一、原則として、漢字は旧字のまま、仮名遣い・濁点の有無も原文通りに翻字した。

一、誤記等のため本人が墨で抹消した箇所は省いて翻字を行った。

一、「、」「ゞ」および「く」はそのままとするが、漢字の疊字は「々」に改めた。

一、誤字・脱字等と思われる場合もそのまま記し、該当部分の右横に（ママ）と付したが、多数回に亘る場合は初回のみにとどめた。但し、明治三十五年二月十九日「風烈くてこまる」中の「烈く」は、一般的には「烈しく」と記し「はげしく」と読むが、ウメ自身が同年三月廿四日に「烈し」とルビを振っているため除外した。

一、原文の読点は、そのまま記し、読みやすいよう適宜、句点を補い、一字分あげた。

一、改行は無視した。ただし、日付・天候、各日末に記された献立・食材名は原文に従い改行した。また、各丁末（表・裏）の区切りを鍵括弧と丁数を記した。

一、注については、本文該当箇所の直後に適宜、「」内において簡潔に記し、前号で記した事項は省略した。

一、竹清の血縁関係については、「不秋草堂日暦（十四）」中、大正十年十一月二十四日の記載（『演劇研究』二十九号）を適宜、参照して頂きたい。

三 翻字（明治三十四年十二月一日〜翌三十五年四月九日）

十二月一日 晴

朝六時に起る。偶 少々病気にて沢さんへつれて行く。夜 客来りて おそくなる。一時にねる。 まぐろ

二日 雨

六時半に起る。午後より 山田方へ行く。夜 綿入縫ひ始める。

鱈 こふの汁

三日 晴

六時半に起る。朝 偶をつれ沢さんへ行く。山田栄さん（ウメの仮親「山田勤」の甥「山田栄二郎」か）来りて晝飯を出す。夜 仕事。十一時にねる。

八ツ頭 焼海苔 うどん

四日 晴

六時に起る。いつもの外に色々せんたく。午後より（十四才）髪結来る。夜 仕事。十一時にねる。

かき

五日 晴

六時に起る。夜 綿を入れる。十一時にねる。

ひらめ

六日 晴

六時に起る。まんぢうを永坂先生の家よりもらう。午後より 山田へ半分まんぢうを持って行く。十時半にねる。 八ツ頭 にんじん

七日 晴

六時に起る。朝 偶をつれ沢さんへ行く。夜 湯に行く。着物やうやく仕上る。火のしをかける。

はうばう 牛肉

八日 晴（十四才）

六時半に起る。昨夜 偶やかましくて困る。夜 仕事。

九日 曇

六時半に起る。朝 沢さんへ憫をつれて行く。大分宜し。夜 足袋のつくろいをする。

大口魚とこぶの汁

十日 晴

六時半に起る。例の外に色々せんたく。晝に百合を煮る。にがくて困る。夜 憫やかましくてねられず。

半へんのつゆ 焼海苔

十一日 晴

六時に起る。夜 仕事。

秋水魚」(十五才)

十二日 晴

六時半に起る。午後より髪結来る。夜 仕事。

十三日 晴

五時に起る。夜 まいかけを縫ふ。

なのしたしもの 蠣

十四日 晴

六時に起る。山田方へ行く。夜 ほどきものをする。

まぐろ うどん

十五日 晴

七時に起る。例の通り今日は精進にて茶飯をたく。夜 憫をつれ湯に行く。

とろ、 まめ

十六日 晴」(十五ウ)

六時半に起る。となりへ、こしてくる。夜 仕事。

いなだと大根のつゆ 焼海苔

十七日 晴 風つよし

六時半にをきる。夜 仕事。

いさき

十八日 晴

六時半に起る。午後より髪結来る。

さば なのしたし物

十九日 雪 夜 雨強し

六時半に起る。帯一本縫ふ。

秋水魚 蠣

廿日 晴

六時半に起る。例の外にいろ／＼せんたく」(十六才)

ぶりのみそづけ

八丁堀より餅を以て来る。

夜 切る。栗と両方なり。

廿一日 晴

六時半に起る。夜 ひもをくける。

八ツ頭 大根 ざうに

廿二日 晴

六時半に起る。午後より憫をつれ湯に行く。今日は冬至にて ゆず湯なり。

ひらめ、たうなす、 ざうに

廿三日 晴

六時半に起る。午後より髪を洗ふ。

さば うの花

廿四日 晴」(十六ウ)

六時半に起る。夜 坐ぶとんを縫ふ。夜 偶泣て困る。

まぐろ ざうに

廿五日 雨

六時半におきる。髪結来る。午後より山田方へ行く。

せいご 蠣

廿六日 風雨烈し 午後よりやむ

七時に起る。夜 偶の着物 縫ひ始める。

大根 まめ

廿七日 晴

六時に朝^(マ)る。夜 仕事。偶 少々づゝ何か言ふ。

まぐろ

廿八日 晴

六時に起る。朝 髪結来る。午後より山田方へ行く。お供へをいっ

しよに頼^(マ)でもらふ積りの所 先へ出来て」(十七オ)

しまい だめなり。夕方 偶をつれ湯に行く。

今日は例の通り精進にて朝 茶めしをたく。

のッぺい 蠣

廿九日 晴

六時半に起る。例の外にねまき二枚洗ふ。道了堂、長谷川さん「竹

清友人で「香川祐廣」門人(金属彫刻)、道了堂世話人の「長谷川義

廣」か。「不秋草堂日曆(三)」(大正四年十一月十七日『演劇研究』十八号)参照)より ゆみ はま〔破魔〕一ツじもらふ。

大口魚 うどん

卅日 晴

六時半に起る。例の外に色々せんたく。午後より だい処をそをし。

三十一日 晴

六時半に起る。午前は色々煮物をする。午後より山田方 其外諸々へ買物に行く。夜 色々用事。」(十七ウ)

明治卅五年一月一日 晴

七時に起る。朝 ざうにを祝ふ。年首客来る。

二日 晴

六時半に起る。朝三時頃 近所に火事ありて起る。ぢき消る。午後髪結来る。年玉をやる。朝はざう煮なり。年首客 大勢来る。

三日 晴

六時半に起る。朝は ざう煮。年首客来る。福引のさいふ縫ふ。

はうぼう まめ

四日 晴

六時半に起る。朝は ざう煮。晝に午飯をたく。今日は ところゝなり。」(十八オ)

夜^レ昨 偶泣て困る。年首客来る。

五日 晴

七時に起る。晝時分 偶をつれ湯に行く。午後より留吉 小供をつれ年首に来る。やうかんをやる。外にも客来る。 まぐろ

六日 晴 午後より風強し

七時に起る。年首客来る。晝に酢だこにて うまかりし。

七日 七時に起る。曇りて終日寒^(マ)むし。夜 僦の着物のつけひもをつける。朝は七草かゆをする。晝 午飯たく。

かれい そば

八日 晴「(十八ウ)」

六時半に起る。朝 起て見ると昨夜 雪と雨降りし處みな凍りてつらゝとなる。髪結来らずして度々むかいに行く。晝時分やうやく来る。午飯後いそいで車にて星野方と大野へ年首に行く。大野にてすしをちそをになる。伯母さんに きょうだいと針箱の代として二円もらふ。夕方帰る。

九日 晴 風強く寒し

七時に起る。例の外に色々せんたく。

いか ぎうに

十日 晴

六時半に起る。例の外に色々せんたく。午後より山田方へ行く。夕方 僦をつれ湯に行く。夜 足袋のつくろい。」(十九オ)

八ツ頭 はす 焼海苔

十一日 晴

七時過に起る。今日は くらびらきにて お供へをこわし それにて雑煮をこしらへる。

海老とみつばの つゆ

十二日 晴

七時に起る。浅草の伯母 小供をつれ年首に来る。さしみにて晝飯

を出す。玉子と僦のおもちやとをもらふ。するめを五枚やる。

十三日 晴

七時に起る。今朝より水道の鐵管より水あふれ出で大へんなり。客ありて晝飯を出す。風のひき づつう、さむけなどしてこまる。夜 うどんを食し」(十九ウ)

よくねる。

なま鮭 いも

十四日 晴

七時過に起る。まだ水道なをらず大変なり。まだ風なをらず困る。明日のあづきがゆのあづき煮る。

十五日 晴

七時半に起る。朝は あづきかゆなり。風 少し宜し。午後 髪結来る。

十六日 晴

七時に起る。第二人、^(マ)數入「數入」に来る。外にも客来る。晝飯にうなぎめしを出す。」(二十オ)

十七日 晴

七時に起る。夜 ときもの「解き物」する。 鮭 あづきにて 雑煮

十八日 晴

七時におきる。午後より山田方へみそを以て行く。みそは八丁堀より 壺たる もらいしもの。

たら こぶの汁 とろゝ

十九日 晴

七時に起る。午後より客来る。かもなんばんを出す。

廿日 晴

七時に起る。午後より髪結来る。

さば

野方へよる。

いか ところ、海苔

廿一日 晴 午後より曇る」(二十ウ)

はす

廿七日 晴
朝五時に起る。午飯後 例の外に色々せんたく。午前 髪^(ママ)〔髪結〕来る。午後より駿河台より妹来る。大野よりかわいい二尾もらいたり。

七時に起る。午後より浅草の吉田へ年首に行く。

夜 仕事。」(二十一ウ)

半へん 湯とうふ

かれい のり

廿二日 雪

七時におきる。夜 じゅはん〔襦袢〕の袖とゑりをつける。

かき ところ、

廿三日 曇

七時におきる。午後より久しぶりにて 偶をつれ湯に行く。夜 自分の綿入をぬい始める。八丁堀より田舎の味噌をもらいしを今朝おつけにする。辛くてたべられず、あまきみそを買ってまぜたれどまだ塩からし。田舎の味噌はまづき物なり。

いも たこ

廿四日 晴 風烈しく寒し

朝七時に起る。夜 仕事。 海苔 やきどうふ 豚」(二十一オ)

廿五日 晴

七時に起る。午後より山田方へ酒のかすを以て行く。海苔をもらつてくる。夜 仕事。

八ツ頭

鮪 ぎょうに

廿六日 晴

朝七時に起る。明日より両三日 偶と二人になりて用心わるき^(ママ)ため大野へ妹をたのみに午後より行く。湯に はいりて帰る。帰途 星

卅一日 雨

六時半に起る。夜 仕事。

たら、こぶ ところ、

廿九日 晴

六時半に起る。午後より山田へ うの花を以て行く。夜 自分の綿入 仕上る。」(二十二オ)

卅日 晴

六時半に起る。午後 妹を帰す。みやげもの しほから かまぼこなど 色々もたしてやる。足袋のつくろいをする。

茄子のからし漬の製し方をおそわる。

なす 一升 かうじ六合 からし四合

塩 壺合 酢壺合の割合にて

初めなすを洗て後 桶の中へならべ 其上へからしとかうじをまぜてふりまき 又ならべては まき する。後に酢をかけるなり。水の上るまで重き」(二十二ウ)

石をのせ 後にて かるき石をのせ、めばりをして置くなり。

二月一日 雨

七時におきる。午後より憫をつれ湯に行く。夜 自分の衾 縫ひ始める。

二日 雨

七時に起る。晝に天ぷらをあげる。午後より髪結来る。夜 仕事。

三日 晴

例の外に色々せんたく。夜 仕事。

四日 晴

今日はせつぶんにて豆をいり福茶をのむ。」(二十三オ)

はす ざうに

五日 晴

朝六時半に起る。午後より ほどき物する。栄さん来る。そばを出す。夜 仕事。

六日 晴

例の外に綿入の裏表を洗ふ。午後より仕事。裕やうやく仕事。夜

いなだ

ほどき物する。

鮭のかす漬 とうふ、な

七日 晴

朝七時に起る。午後より髪を洗ふ。夜 足袋のつくりをする。

半へん、しらたき、みつばのつゆ」(二十三ウ)

八日 晴

六時半に起る。夜 着物と じゅばんのゑりを、かけなをす。

八ツ頭 鳥

九日 晴

張ものをする。午後より髪結来る。憫をつれ湯に行く。

鮭のかす漬 大口魚 こぶ

十日 晴

七時に起る。風強く寒し。張もの少しする。星野方より味噌 取りに来る。

十一日 晴 午後より少し雪降る

六時半におきる。夜 仕事。

めざし」(二十四オ)

十二日 晴

七時に起る。例の外に色々洗ふ。午後より憫をつれ湯に行く。夜 裕羽織 縫ひ始める。

するめの煮付 焼海苔

十三日 雪

六時半に起る。夜 仕事。

めだい 湯とうふ

十四日 晴

例の外に色々せんたく。夜 仕事。

いさき

十五日 晴

今日は精進にて茶飯をたく。午後より髪結来る。夜 仕事。羽織
仕上る。

まめ」(二十四ウ)

十六日 晴

朝七時におきる。午飯前に栄さんの父「ウメの仮親「山田勤」の兄
「山田景成」か」来りておそくなる。午後より憫をつれ湯に行く。夜
ほどきものする。

いさき

十七日 晴 風強く寒し

朝六時半に起る。夜 仕事。

半へん、みつばのつゆ

十八日 晴

例の外に 半天のせんたくする。

めざし ぎょうに

十九日 晴

風烈くてこまる。

廿日 曇

夜 綿入 縫ひ始める。

すいとん」(二十五オ)

廿一日 晴

朝 髪結来る。来客あり。晝にうなぎめし出す。午後より憫をつれ

湯に行く。

かきとうふ

廿二日 晴

例の外に色々せんたく。夜 仕事。

半へん くわい

廿三日 晴

例の外に浴衣二枚洗ふ。夜 仕事。

かまぼことみつばのつゆ 鮭

廿四日 晴

朝六時半に起る。晝前 山田方へ行く。

はうぼう

廿五日 晴」(二十五ウ)

朝十時頃より憫をつれ横浜へ行く。色々馳走になり鳥一羽もらいた
方帰る。

廿六日 晴

午後より山田方へ行く。留吉来る。鳥を煮て夕飯を出す。晝に め
ごち五尾 猫にとられる。夜 仕事。

廿七日 晴

夜 仕事。

鳥

廿八日 晴

朝 髪結来る。田舎の味噌はうまき故くれると云ふ。重箱に入てや
る。午後より妹来る。
くわい」(二十六オ)

三月一日 雨 豆いりをこしらへる

朝六時半に起る。雨烈しく雷なる。急のづく。裏 綿入 二枚 夜
たちあわせをする。

二日 晴

大口魚 干ばか〔馬鹿貝の干物〕

朝七時に起る。綿入縫ひ始める。

はうぼう

三日 晴

午前 上野の松坂屋へ唐棧〔細縞の綿織物〕を買いに行く。外の店に
はなし。午後 佃をつれ湯に行く。仕事をする。 めたい

四日 晴 朝 雨降る

仕事。近頃は夜十二時頃まで仕事する。佃 夜泣て困る。

半へん 湯とうふ

五日 晴

仕事。午後 綿を入れる。夜も仕事。二枚仕上る〔二十六ウ〕

せいこ

六日 晴

例の外に色々せんたく。午後より買物ながら山田へ行く。夜 縫ひ
かけの着物の綿を入れる。

まめ

七日 晴

色々せんたく。綿入壹枚 仕上る。

鮭 里芋 にんじん

八日 晴

朝 せんたく。午後 髪結来る。夜 羽織のたち合する。

せいこ

九日 晴 午後より雨

朝六時に起る。佃 風を引 少しやかましい。羽織 縫ひ始める。
門司より佃のづきんもらう。

めざし〔二十七オ〕

十日 晴

朝六時におきる。午後より仕事。夜 羽織仕上る。近所へ嫁来りて
ちかづきにくる。

十一日 晴

今朝は佃めづらしくおそくまで 能くねる。午後より足袋のつくろ
い。夜は ほどき物をする。

十二日 晴

朝 星野方より旧の初午なりとて赤飯一重もらう。晝時分 髪結来
る。綿入二枚洗ふ。午後より佃をつれ湯に行く。夜 ほどき物する。

ぶり 焼海苔

十三日 曇 午後より雨

色々せんたく。雨降りて かわかず。夜 ほどき物。

かき とうふの汁〔二十七ウ〕

十四日 曇 午後より 雨

綿入一枚洗ふ。よくかわかず。夜 ほどき物する。

十五日 晴

近所より赤飯一重とするめ七枚もらう。嫁さんの返礼なり。山田方
へ赤飯少し持て行く。夜 ほどきものする。 まめ

十六日 晴

張物をする。頭痛しては いたく いかたべられぬ。

まぐろ

十七日 曇

午前 張物少しする。午後より憫をつれ湯に行く。

さめ

十八日 晴「二十八オ」

朝 髪結来る。張物をする。夜 じゅばんの糸りをかける。

十九日 晴

今日は彼岸のくばり物する。午後より星野方へ行きながら大野へ行く。夕方 山田へ行く。八丁堀よりおはぎ一重もらう。夜 母来り。又 例の話にて困る。

干大口魚

廿日 晴

星野の家内と川崎大師へ憫をつれ行く。夕方 帰る。他よりおはぎ一重もらう。それを星野へやる。

廿一日 曇 少し雨

色々せんたく。雨降りて かわかず。憫の裕 仕上る。夜 憫泣て困る。十二時にねる。 八つ頭 はす 天ぶら「二十八ウ」

廿二日 雨

星野より大ふく十五 近所二軒よりおはぎ一重づゝもらう。定どんに帰りに おはぎ持て行てもらう。晝飯をたべさせる。夜 自分の綿入縫ひ始める。

かき

廿三日 晴 曇 午後より雨

近所より おはぎとすし一重づゝもらう。午後より仕事。夜 憫泣て困る。客来る。夕飯を出す。

廿四日 昨日と同じ 寒さ烈しつよ

午後より髪結来る。夜 仕事。

大口魚

廿五日 曇 雨少し降る

午後より綿入物する。

まめ「二十九オ」

廿六日 晴

いつもの外に浴衣二枚洗ふ。綿入壹枚仕上る。

八ツ頭 こんにやく

廿七日 雨

ほどきもの二枚する。午後より憫をつれ湯に行く。

廿八日 晴

綿入二枚せんたく。午後より髪を洗ふ。今朝は精進にて茶飯をたく

廿九日 晴

張物をする。近所へ引こし来りて そばの切手もらう。

ひらめ

三十日 風 時々雨降る

色々せんたく。横浜の芳ちゃん来る。午後 髪結来る。憫をつれ湯に行く。星野氏来る。はうばう二尾もら「二十九ウ」

(一丁分欠損)

色々せんたく。髪結来る。午後より八丁堀よりおよしさん〔竹清の異母妹「よし」か〕来る。偶に帽子とおもちや貰ふ。仕事する。

九日 曇

偶のうゑはうそう〔種痘〕二ツでつく。沢さんへ見せに行く。午後より仕事。〕（一冊目裏見返し）

〔二冊目終了、二冊目以下次号〕